

ベトナムのホア・ルー祭―日本の祇園祭との比較―

ゴ・フォン・ラン

はじめに

現在、東アジアおよび東南アジア各国（以下、「アジア」）に住んでいる人々は「個性」をアピールする傾向が増えてきているが、だからといって、この地域で「共同体の連結性」が崩壊したわけではない。

それでは、コミュニティの連結や相互信頼を重視するアジアの社会において、「共同体」の優位性を主張する考え方と、「個性」をアピールする姿勢とを結びつけるものは何か。

私の研究チームは、ベトナムと日本の伝統祭礼の体験から、その問いの答えが、伝統祭礼―各個人のための娯楽性を発揮しつつ、各個人が他者との協働を通じ、団結して共同体の伝統を維持する活動―にあることを見出した。

本稿では、伝統祭礼の例として、ベトナムのホア・ルー祭を取り上げる。私の研究チームは、ホア・ルー祭が、著名な日本の伝統祭礼のひとつである祇園祭との間に、文化的に類似するところがあることを発見した。以下では、ホア・ルー祭を紹介しながら、祇園祭との共通点を探ってみたい。

一、ホア・ルー祭

かつて「チュオン・イエン祭」(長安祭)、あるいは「草旗祭」と呼ばれ、李朝(一〇〇九年)から行われてきたホア・ルー祭は、ベトナムの丁朝(九六八〜九八〇年)、前黎朝(九八〇〜一〇〇九年)や李朝(一〇〇九〜一二二五年)の歴史、および丁部領(ディン・ポ・リン)―当時の大躍越を統一した英雄で、丁朝の建国者―の生涯を再現した伝統的な祭礼である。

かつて、ホア・ルー祭はベトナムの各封建王朝によって厳粛かつ豪華に行われ、阮朝(一八〇二〜一九四五年)のある時期に国礼(国家の祭礼)のかたちで遂行された。しかし、フランス植民地時代(一八五八〜一九四五年)の間、「村のお祭り」として、規模が縮小されて簡易に行われるようになり、一時期は中止されたこともあった。

その後、一九八三年にホア・ルー祭は復興され、ベトナムの特色ある伝統文化や芸術を保存する祭礼として全国に知られるようになった。二〇一六年にはベトナム最大の祭礼の一つとして、ベトナムの無形文化財に認められた。さらに、国家レベルの祭礼として国家の儀式のかたちで行われるよう、文化・スポーツ・観光省で検討されている。また、現在、ベトナム政府は、ホア・ルー祭を「国民の祭礼」として認めることについても検討している。

本祭礼は丁部領の誕生日(旧暦二月一五日)、あるいは、旧暦三月の初旬ごろ(三月六日から一〇日まで、もしくは三月八日から一一日まで)に行われている。伝承によると、旧暦三月一〇日は丁部領が皇帝となった日で、三月八日は黎大行(レー・ダイ・ハイン、前黎朝の最初の王)が亡くなった日とされる。

ホア・ルー祭が、李朝から阮朝に至るまで、特に阮朝に国礼となって以降、具体的にどのように行われてきたか、先行研究でもまだ明らかにされていない。ただし、フランス植民地時代

に村のお祭りとして行われていたところに、ホア・ルー祭は、ベトナムのあらゆる伝統祭礼と同様、「礼」と「会」の二つの部分で構成されていたことがわかっていく。

(一)「礼」

基本的にホア・ルー祭の儀式的な順序は、左記の通りである。

丁部領を祀る寺院のお宮開き↓焼香式↓お水取り↓火神輿渡御↓沐浴式（仏像を洗う儀式）↓供物奉呈↓お神輿の巡行↓伝統的な礼拝↓祈祷↓灯籠流し↓感謝の礼

ホア・ルー祭のもっとも重要な儀式は、夜に行われる「伝統的な礼拝」である。丁部領を祀るお宮とともに、高さ約十メートルの庭燎（お宮の庭に立てるトーチ）にもライトが点灯され、鮮やかな光と供え物の色が神秘的な雰囲気醸し出す。その時、五人の儀式担当者（儀式の主



写真一 お水取り行列

催者一人、随行者二人、手伝いの者二人）が約六時間、伝統的な礼拝を行う。これはホア・ルー祭が行われる三日間の夜間に行われ、地域住民や観光客も数多く参加する。

「伝統的な礼拝」がホア・ルー祭の最も重要な儀式とみなされるのであれば、「お水取り行列」は、水を飲むことで、山川の霊気や国の起源、共同体の過去、現在、将来などについて考え、国を建てた丁部領の恩義に感謝するという、「飲水思源」の思想を体現している。

「お水取り行列」は、用意周到に準備される。当日、行列の参加者は朝早く、丁部領を祀る寺院を出発し、ホアン・ロン川（皇龍川）に向かい、川の水を瓶に入れて慎重に運び、寺院を持ち帰る。この行列は、最初に五色旗を持つ一団が二列で歩き、その後ろに「八音」や「太鼓」の囃子の一群、丁部領の仏壇が載せられた「八貢」のお神輿を運ぶ一群、そして丁朝の兵士の衣服を着た健康な男性の若者八人と続く。また、政府や各省県村の代表者や観客も、行列に付き



写真二 お水取り

て行く。これに続き着飾った少女たちが、傘が付いている「八真」のお神輿を運ぶ。最後尾は、老人団体、婦人団体、各地方からの「女官礼拝団体」など、礼物を運ぶ者たちが務める。

(二)「会」

ホア・ルー祭の儀式が終わると、次に「会」、いわゆる娯楽の時間に入る。

遊仙、龍舞、トトーム（ベトナムのカルタの一種）、人文字、競泳、ボートレース（龍をかたどった舟を大勢の漕ぎ手で漕ぐレース）、棒回し、人間将棋、ネムコン（玉入れ）、歌合戦、レスリングなど、ベトナムの伝統的な祭礼における普通の遊び以外にも、ホア・ルー祭特有の遊びもある。それは、「太平」（丁朝で定められたベトナム初の元号）の字を書く競技と、草旗合戦ゲームである。草旗合戦ゲームは、昔、ホア・ルー祭の一つの儀礼として行われていたが、現代では民間の演劇として行われている。

草旗合戦ゲームは丁部領が幼いときによく遊



写真三 草旗合戦ゲームの練習

んだゲームである。現代の民間演劇における草旗合戦ゲームは、丁部領の幼いときについての伝説を再現するだけでなく、民族の勇氣や国の平和と繁栄を象徴する役割も担っている。

・ホア・ルー祭への住民参加

毎年新曆四月ごろになると、チュオン・イエン社（長安社）の住民は、普段の農作業を一時的に休み、地方政府（人民委員会）の管理の下、地域の各グループや社会団体に分けられ、ホア・ルー祭に向け、礼拝儀式の供え物の準備やお水取り行列、草旗合戦ゲーム、「太平」の文字や女官礼拝の練習などに集中する。

具体的には、老人会は礼拝儀式を担当し、丁部領を祀るお宮で「九曲」（丁部領の功績や丁朝の平和・繁栄を賛美する九つの歌曲）を読む。婦人会は女官礼拝や神酒奉呈の練習をする。農民会、退役軍人会や青年団体は、伝統的な芸能や音楽を演じる囃子や竜舞などを担当する。最後に、丁部領が合戦ゲームを興じた年齢である十三歳の少年が六十人ほど選ばれ、ホア・ルー祭で演じられる合戦ゲームを練習する。

ホア・ルー祭にかかる費用は、政府や地方政府から交付される補助金のみに頼るわけではなく、多くは祭礼の遂行者や管理者を含む「慶節委員会」や、ホア・ルー地区に住む住民自らがこの地域で行ったビジネスによって賄ったり、地方政府と関係を持った企業（「孟嘗君」と呼ばれる）の寄付金に頼ったりしている。これらの財源は、祭礼が良好で順調に行われるための重要な役割を担っている。

普段の日常生活では、多少は競争しているチュオン・イエン社の住民たちだが、ホア・ルー祭になると、お互いに協力し、祭礼のために人的リソースや費用を喜んで拠出する。住民の自発性や自主性、また祭礼への喜びや誇りなどは、昔から現在に至るまで、祭礼を維持・保存・

継続することに大きな役割を果たしている。

二、祇園祭との比較

ホア・ルー祭での住民の主な信仰が、国の英雄の丁部領を対象とするものであるのに対し、祇園祭では怨霊や天王が信仰の対象とされている。

平安時代の八六九年に平安京（現在の京都）で流行している疫病を鎮め住民の生活を守るために、御霊会という行事が行われた。京都人はこの信仰により、古代から現在に至るまで千年以上、祇園祭の神様を楽しませるため、御霊会や山鉾巡行を続けている。同じ信仰や宗教への信念、強力な霊威を持った神（御霊神）への崇敬を共通して持つことで、京都住民は相互扶助の意識や連帯感を保ってきたのである。

祇園祭のある七月になると、京都の山鉾町に住んでいる住民（山鉾町衆）は、「山鉾町会」か「山鉾保存会」という、彼ら自身が自発的に作った組織で互いに結びつき、山鉾町会長、あるいは、山鉾保存会理事長の指示の下で、役割を分担して協力し、祇園祭の山鉾巡行を行うことに努める。



写真四 祇園祭（後祭）の山鉾巡行

各山鉾町会は「祇園祭山鉾連合会」という組織を作り、祇園祭の遂行や予算の配分、山鉾巡行の順番決定などを相談しながら決める。彼らはほぼ一カ月間で、お囃子、神輿洗、山鉾建て、前祭り（七月一七日）と後祭り（七月二四日）の山鉾巡行など、祭礼の準備を整えている。

三十三の山鉾町では、それぞれが、自らの町の山や鉾を丁寧に保存・復興している。そこで豪華かつ綺麗に飾られた山や鉾は、毎年の巡行で独特の美しさを見せている。一つ一つの山鉾町は小さなコミュニティとなり、山や鉾を信仰や宗教の象徴とし、また町衆の独特な伝統的工芸品産業を次世代に引き継ぎ、祇園祭を続けていく。

伝統祭礼は、コミュニティの文化活動を通して地域の住民と祭礼の参加者を結び付ける。彼らは信仰や文化的価値観を共通に持ち、それを誇りとした。その時こそ、個人間の日常生活における社会的距離や格差、競争心が除去され、人々は一緒に文化を創造したり、文化的価値観を共有したりする。このことが、ホア・ルー祭と祇園祭のもっとも顕著な共通点である。

（付記）

本研究では、グエン・ティ・トゥー・フォン氏（ベトナム文化観光スポーツ省附属国家文化芸術研究所）およびフン・ジエウ・アイン氏（ベトナム社会科学アカデミー）の協力を得た。

（一）二〇一五年四月一七日、ニン・ビン省ニン・ビン市において、ベトナム歴史科学会とニン・ビン省人民委員会共催で、「丁先皇と国家統一事業・チュオン・イエム（長安）祭を国家レベルの祭礼に認定することについて」と題するコンファレンスが開催された。

（二）古代都市の人々は、当時流行している疫病の原因を、政争に敗れて横死した人々の怨霊の祟り、

あるいは異国からやってきた疫神（行疫神）のしわざとみなした。これらへの対策として、御霊会が行われた。

（ベトナム社会科学アカデミー東北アジア研究所・日本研究センター所長／
日文研外国人研究員）